

群馬県立二葉高等特別支援学校 学校評価一覧表（令和7年度版）

（様式）

羅針盤			担当	方策	点検・評価		達成度	達成状況の分析	学校関係者評価	次年度の課題
評価対象	評価項目	具体的数値項目			自己評価	外部アンケート等				
Ⅰ 幼児児童生徒の地域における豊かな生活の実現に向けて努めていますか。	1 保護者、地域、関係機関に学校の教育活動について、具体的に伝えていますか。	○通信等で情報発信を行い、生徒の活動状況(学習面や行事)が分かると、保護者の80%以上が満足している。 ○学校のホームページを月1回以上更新し、保護者の80%以上から肯定的な評価を得ている。	・教務部 ・各学習集団 ・寮務部	○年2回の授業公開を行う。 ○学校通信「青嵐」や学校ブログ、各課程通信や寄宿舎だより等を通して、日頃の学習や寄宿舎での生活の様子を分かりやすく伝える。	1学期 A	1学期 A	A	1学期アンケートにおいて学校の教育活動をわかりやすく伝えているかの質問には、保護者から「そう思う」67%、「ややそう思う」33%との評価を得ており、令和6年度より「そう思う」の割合が21ポイントほど増加している。また、2学期アンケートにおいて学校ブログ等の内容はお子さんの活動の様子等を伝えていると思うかの質問には、「そう思う」69%、「ややそう思う」31%の評価を得た。令和6年度よりブログという形で学校行事や日々の出来事を週1回でアップする取組を始め、それが定着してきたと考える。今後も授業や給食、学校行事等での生徒の学習の様子を定期的に掲載していく。	・学校通信の発行や学校ブログの掲載など、学校での様子をこまめに発信されている点は大変素晴らしい取り組みであると感じた。 ・学校通信については、紙媒体での配布からホームページ掲載を中心とする形へ移行することも一案ではないかと感じた。業務効率化や保管の利便性の観点からも検討の余地があると思う。 ・学校ブログは更新頻度が高く、保護者の満足度も高いことから、非常に良い取り組みであると感じた。一方で、高頻度の更新が教職員の皆様の業務負担になっていないかという点については、適切なバランスを図りながら継続をお願いしたい。	・学校ホームページの構成の検討を続けていく。「生徒の活動の様子」は分かりづらいため、「学校ブログ」に統一する必要があるか検討する。
	2 保護者、地域、関係機関との共通理解が深まり、有効な支援が行われていますか。	○交流及び共同学習について、80%以上の保護者が子どもにとって有用であると感じている。 ○ボランティア登録者が授業に入ることにについて、80%以上の保護者が子どもにとって有用であると感じている。	・生徒指導部 ・教務部 ・各学習集団	○ワイルドナイツスポーツプロモーションや高崎女子高等学校吹奏楽部等との交流を行う。 ○ポッチャやeスポーツ大会への参加、バース大学とのeスポーツ等による交流に取り組む。 ○地域のボランティアと協力しながら、読み語り等の授業を行う。 ○交流及び共同学習やボランティア登録等を通して、本校の教育に関心を持って協力していただける支援者を増やす。	1学期 A	1学期 A	A	1学期はワイルドナイツスポーツプロモーションとの交流を行った。2学期は、II課程において群馬バース大学とのeスポーツでの交流及び共同学習、全校において高崎女子高等学校吹奏楽部との交流及び共同学習を実施した。また、通年でIII課程では読み語りや貼り絵のボランティアを招いて授業を行った。最終的に、子どもの成長に有用であるかとの質問には、保護者からは「そう思う」67%、「ややそう思う」33%、教員からは「そう思う」76%、「ややそう思う」24%の評価を得た。交流及び共同学習への理解が進んでいることが伺える。今後も積極的に交流の機会を持ち、地域や関係機関との共通理解を深めていく。	・卒業後のことを考えると、学校として大切なことの1つはやはりコミュニケーションであろうと思う。例えば、eスポーツなどはそのヒントになり得ると思うので、より積極的に外部にアピールできること良い。 ・療養園と学校では、また違う顔を見せている生徒が多く、とても大人の顔をしているように見える。そうした様子を療養園の職員にも見せてあげたい。こうした取り組みを通して、療養園としても生徒・学校への理解を深められること良い。 ・eスポーツやポッチャなどの外部との交流は、人とのコミュニケーションの場となり、生徒にとって意味のある活動である。これからも意図的にそうした機会を設けてほしい。 ・内容が固定化してしまわないよう、必要に応じて新たな地域資源の開拓等も視野に入れていくことも有意義ではないかと感じた。	・交流及び共同学習において、相手校や団体等と相互に学び合える関係となるように、生徒が主体的に事前学習や準備を行えるように学習を深めていく。
Ⅱ 地域の特別支援に関するセンター的な役割を果たしていますか。	3 障害のある幼児児童生徒の教育について、助言援助に努めていますか。	○外部からの相談者の80%以上が相談への対応に満足している。	・専門アドバイザー ・教務部 ・進路指導部	○本校のセンター的機能の役割や取組等をホームページや学校説明会等で発信する。 ○相談内容に応じて、センター的機能の担当者から適切な人選を行って対応する。ケースによっては外部専門家と連携をしながら進めていく。	-	1学期 A 2学期 B	A	学校見学を含めて、本校に相談のあった方にアンケートを実施した。知りたかった情報を得られたかとの問いについては、「全て得られた」50%、「大体の情報が得られた」50%の回答であった。教職員の対応については、年間通して全員から「大変満足している」との回答を得た。今後も丁寧な対応を心がけ、相談者が知りたい情報を察知しながら、相談に当たってきたい。	・前年度等の結果との比較があると、経年変化が把握しやすくなり、より参考になるのではないかと感じた。	・相談内容に応じて、センター的機能の担当者から適切な人選を行って対応する。必要に応じて外部専門家と連携する。 ・センター的機能の役割や取り組みを学校ホームページや学校説明会で引き続き校内外に周知する。校内では適切な人選、担当者同士の協力、校外には機能について周知する。 ・前年度だけでなく、過去数年間の記録を参考にして相談業務に当たる。
Ⅲ 幼児児童生徒一人一人の実態に応じた適切な指導をしていますか。	4 個に応じたきめ細かな指導を行っていますか。	○すべての教員が、必要に応じて、ICT機器を活用して指導することができる。 ○一人一人の学習及び生活の状況について、「個別の指導計画」を基に教員間、教員と寄宿舎指導員間で確認及び検討する機会を年3回以上設けている。	・教務部 ・研修部 ・各学習集団 ・寮務部	○係を中心にICTに係る情報を集約し、その情報に基づいた最新アプリの使い方等の研修を行うことで、授業の中でICT機器を積極的に活用できるようにする。 ○定例の課程会議や学年会議等で生徒の情報交換を行い、担当する教員間で統一した指導ができるようにする。 ○保護者面談の結果や生活指導目標を基に担任と寄宿舎指導員間で情報交換を行う。	1学期 B	1学期 A 2学期 A	B	授業においてICT機器を活用している教員は、1学期アンケートでは96%、2学期アンケートでは100%であった。夏季休業中にはICT研修として、総合教育センター指導主事を講師に招き、生成AIの最新情報と活用法を知ったり、校内のPC係を講師としてCanvaの機能を演習を通して学ぶ機会を設定したりしたことが割合を高めた1つの要因と思われる。これらの研修を経て、紹介されたアプリ等を業務に活かそうと感じている教員が91%ほどおり、教員全体として意識は高い。 寄宿舎では一人一人の自立目標の達成を目指し、担任と共有・連携して生徒の生活指導・学習指導の補助に取り組んでいる。	・パーティーの準備(ゲームの得点表づくりなど)の様子を見させていただいた。生徒の没入感を大切にした授業を展開していたと思う。 ・特に自立活動を主とした教育課程の生徒にとっては、学校に来ることが目標とも言える。環境が恒常化しやすいため、場面を変えるなどいろいろな刺激を与えてあげたい。 ・教師が生徒一人一人に向き合っている姿勢を見せることは、生徒にとっても幸せなことである。 ・ICTへの取組を積極的に進められ、すべての教員がICT機器を活用されている点は高く評価できると感じた。今後、ICTを活用して学校ブログの記事作成を生徒が担当などの展開も検討されてみてはどうか。主体的な学びの機会にもつながるのではないかと思う。	・教員のみならず、生徒のICT活用も活発になってきた印象がある。これまでの授業や学校行事での活用に加え、学校ホームページの記事作成にも生徒が参加できるようにする。 ・生徒の実態把握の方法やそれに応じた適切な学び、学びに応じた学習場面の設定についての情報提供をすることで、学びに即した場面や環境を検討できるようにする。 ・寄宿舎の指導の記録を生かし、教員・寄宿舎指導員間の情報共有と連携のより一層の充実を図る。
	5 指導内容の確実な定着を図る授業が行われていますか。	○自分が実施した研究授業に対する指導助言等を受けて、80%以上の教員が指導方法の改善を行っている。	・研修部 ・各学習集団	○校長の授業観察の際に、当該教員以外の教員にも積極的に参加するように促したり、教員相互の研究授業に取り組むよう促したりすることを通て、自身の授業を振り返り、授業改善に活かす。	1学期 A 2学期 A	-	A	指導方法の改善を行った教員は、1学期アンケートでは100%、2学期アンケートでは95%であった。具体的な改善案を提示したことが結果に表れている。今後もより良い授業実践ができるよう、教員相互の研究などを行っていく。	・教師の余裕がよい授業を作る。働き方改革を進めることで、より良い授業づくりに取り組んでほしい。	・教員相互の研究授業について、授業研究会の記録を共有し、授業研究会に参加できなかった教員とも情報を共有できるようにする。 ・授業を参観しやすい手立てや意見、感想を言いやすくなるツールを活用し、授業研究に参加しやすい環境設定をする。
Ⅳ 健康や安全の確保に努めていますか。	6 健康に関する配慮や対応を適切に行っていますか。	○生徒が健康、安全に過ごすことができるように対応していると保護者の80%以上が安心感を得ている。 ○教室前の花壇の整備を80%以上の教員や保護者が行っている。	・保健部 ・生徒指導部 ・養護教諭 ・各学習集団 ・渉外部 ・寮務部 ・事務部	○感染症対策として、手洗いや消毒を徹底する。また、隣接する二葉特別支援学校や群馬整肢療養園と感染症情報を共有し、学校全体の予防意識を高める。 ○各学習集団が植栽や有毒植物の除去等、教室前の花壇の整備を行う。 ○保護者と連携して校内の除草を行い、学習環境を整える。 ○「いじめ対策防止委員会」を設置し、いじめの未然防止、早期発見及び早期対応等を組織的かつ実効的に行う。	1学期 A 2学期 A	1学期 A 2学期 A	A	生徒に対しては、現在もマスク着用等の感染症対策を続けている。保護者への安全に過ごしているかという質問には、1学期に行ったアンケートでは「そう思う」「ややそう思う」が96%、2学期アンケートでは「そう思う」「ややそう思う」が90%という評価を得た。特に2学期は、感染症の流行を予測した対応が必要であろう。引き続き生徒の健康状態の把握を適切に行い、関係者で情報共有をした上で、学校として基本的な感染症対策を周知徹底していく。	・生徒の健康に配慮した環境や、姿勢の学習などありがたい限り。今後も続けていただきたいと思う。 ・安全面について、特にSNSの扱いについては教師も自分事として捉えなければならぬ。スマートフォンを初めとする情報機器をいかに扱うか、今後も指導を継続してほしい。	・今後も時流に鑑みながら、感染症に関する対応マニュアルの見直しを継続して行う。 ・情報モラル教育をこれまで以上に重視し、内容の見直しと充実を図る。
	7 危機管理体制が確立され、緊急時への備えができていますか。	○危機管理意識の向上のため、教職員全員によるヒヤリハット事例、その蓄積及び分析した内容を共有する機会を年3回以上設けている。	・各学習集団 ・教務部 ・保健部 ・寮務部	○ヒヤリハット事例や事故事例を連絡掲示板や医療的ケア委員会を通じて情報共有したり、朝会で報告したりして共通理解を図る。また、保健部が中心となり、事例を分析し、未然防止に必要な環境整備や指導方法の改善に努める。	1学期 A 2学期 A	1学期 A 2学期 A	A	ヒヤリハット事例や事故事例を連絡掲示板に載せたり、会議等で情報共有したりしたことは、事故未然防止につながったかとの教職員への質問では、1学期アンケートでは、「そう思う」「ややそう思う」合わせて97%、2学期アンケートでは、「そう思う」「ややそう思う」合わせて92%であった。定例の会議で事例を共有し、具体的な対策を立てていることが、インシデントやアクシデントの予防に繋がっていると考えられる。一方で、報告が繰り返されることで意識が低くなるリスクも否定できないので、事故防止への意識の向上が課題である。	・教師が生徒の体調変化に寄り添って対応している姿は素晴らしい。今後も継続してほしい。	・今後も事故の潜在的リスクを減らしていくために、ヒヤリハット事例を提出しやすいような方策を検討していく。 ・ヒヤリハットや事故の未然防止だけでなく、生徒の特性や障害への配慮を理解するためにも、ヒヤリハット、事故事例の共有は必要であるので、今後も続けていく。
Ⅴ 将来の生き方に結びつく進路指導を行っていますか。	8 キャリア教育の視点から、指導内容を整理して体系的な指導を行っていますか。	○現場実習(就業体験・施設体験)にかかる卒業後の生活を意識した進路指導の内容について、生徒や保護者の80%以上が満足している。	・進路指導部 ・寮務部	○キャリア教育全体計画や3年間の進路指導の取り組みに関する教職員の研修を実施し、外部と連携した支援を行う。 ○施設見学や実習等を依頼する施設や新規事業等のパンフレットやリーフレット等を置き、玄関ロビーの進路コーナーの充実を図る。また、保護者や教職員への適切な情報提供を行うことで進路に対する共通理解を深める。 ○保護者向けの進路相談会の中でキャリア教育全体計画について説明し、学校と家庭の連携・継続的支援を進める。	1学期 A 2学期 A	1学期 A 2学期 A	A	進路に関する取り組みに満足しているかとの質問には、1学期アンケートでは保護者から「そう思う」「ややそう思う」合わせて84%、「少し不満がある」16%の評価を得た。2学期アンケートでは保護者から「そう思う」「ややそう思う」合わせて89%、「少し不満がある」11%の評価を得た。進路について知りたい情報として施設の空き状況や送迎に係るサービスのことがあり、改善傾向にあるとは言え進路に係る保護者の不安が不満に繋がっている可能性がある。これまで以上に丁寧な情報提供が求められている。	・ICTを活用しているいろいろなことにチャレンジしている。それを通して、「自分の動きで今後の生活を切り拓く」ことに繋がっているように思う。	・卒業後の生活や進路を見据えて積極的に施設見学や現場実習を行い、保護者や外部と連携しながらキャリア教育の充実を図る。
	9 保護者、関係機関との連携のもとに発達段階に応じた進路指導を行っていますか。	○生徒の80%以上が市町村の福祉課や相談支援事業所等の支援機関と連携している。	・進路指導部 ・各学習集団 ・寮務部	○保護者のニーズを把握し、サービス担当者会議や個別のケース会議等において情報交換を積極的に行う。 ○保護者と協力してよりわかりやすい「サポートブック」や「生徒実態表」を作成し、実習や移行連絡会、卒業後の施設での生活に活用していく。 ○相談支援専門員との情報共有から卒業後の進路について検討を図る。	1学期 B 2学期 B	1学期 B 2学期 B	B	日頃より相談支援事業所等と連携しているかの質問について、1学期アンケートでは保護者76%・教員は85%、2学期アンケートでは保護者95%・教員89%であった。進路指導についての研修にて教員が障害福祉サービスの仕組みや相談できる専門家について説明できるだけの知識を身に付ける。また、ケース会議の機会を使って情報交換を密に行うことを継続していく。	・特に通学支援事業の開始は、保護者にとっても地域と繋がりが、負担の軽減にも繋がる。一歩を踏み出したことは大きい。 ・保護者の心配事の1つに進路の確保がある。進路指導に課題が出てきてしまうのは、施設の空きがないことなどへの心配が表面化しているのではないかと思う。情報提供が大切である。 ・どの学校でも、進路指導は課題に挙がるもの。それだけ悩むことでもある。保護者のためにも、今後も継続して情報発信してほしい。	・保護者や相談支援事業所、障害福祉サービス事業所等と卒業後の進路について情報を共有し連携しながら進路指導を進める。